

眼の構造と加齢性変化

横浜市立大学大学院医学研究科眼科学教室 竹内 正樹

KEY WORDS

- 高齢化社会
- 加齢性変化
- 眼疾患
- 視覚障害

Eye structure and age-related alterations.

Masaki Takeuchi (助教)

I. 超高齢社会と日本

世界保健機関では65歳以上を高齢者とし、65～74歳までを前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と定義している。内閣府の報告によると、2017年のわが国の65歳以上の人口は3,515万人であり、総人口に占める割合は27.7%となっている(図1)¹⁾。日本は高齢化率が21%を超える超高齢社会であり、出生数の減少や高齢人口の増大が続く現状では高齢化はさらに進行し、2040年には国民の3人に1人が高齢者となることが推計されている。

II. 眼の構造と加齢性変化

感覚器の1つである眼は視覚を司る。ヒトは視覚から多くの情報を得ており、視覚器の障害は生活の質(quality of life: QOL)に大きく影響を与える。視器は光刺激を受容する眼球、その信号を中枢に伝える視路の一部である視神

経、そして眼瞼や涙器、外眼筋などの眼球付属器によって構成される(図2)。以下に各組織と加齢による変化を記す。

1. 眼瞼

眼瞼は眼瞼皮膚に加えて眼輪筋や眼瞼挙筋といった筋組織、マイボーム腺をはじめとする分泌腺などからなる。眼瞼皮膚は人体の皮膚のなかでも弾性に富んでいるが、加齢によってコラーゲン線維の減少や弾性線維の変性、汗腺や脂腺の減少が起こる。上眼瞼では眼瞼挙筋と瞼板との接合が弱まることで老人性眼瞼下垂をきたす。また眼窩の眼球周辺の脂肪組織の萎縮により眼球および眼瞼が後退することで上眼瞼が陥凹し、いわゆる奥目となる。下眼瞼では眼輪筋の筋線維の萎縮によって眼瞼は弛緩し弛緩性眼瞼外反症や、また眼窩隔膜の菲薄化によって眼窩脂肪が前面に突出して下眼瞼脂肪脱(baggy eyelid)となる。